

「スローライフ in 掛川2003」協賛

第22回

# 掛川考古展

## 「古代東海道と佐野郡」

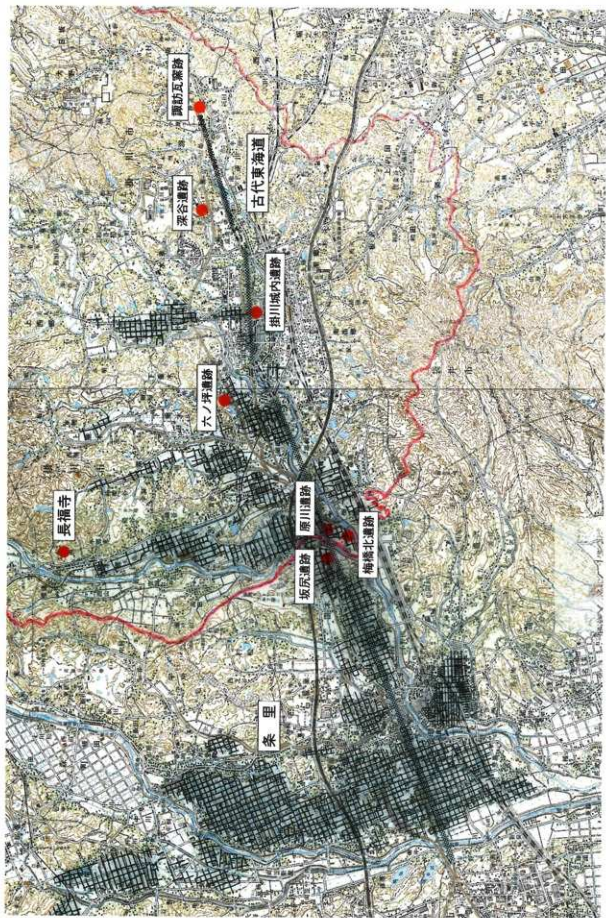
■と き 平成15年11月19日(水)～11月30日(日)

■ところ 掛川市立中央図書館 生涯学習ホール



深谷遺跡出土遺物

掛川市教育委員会



古代東海道沿線の遺跡と条里

## 東海道

古代、中央政府は「五畿七道」といって、日本国内を12分割して治めていました。五畿とは、大和、山城、河内、摂津、和泉を指し、七道とは、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の7つを言います。

東海道には伊賀・伊勢・志摩（三重県）、尾張・三河（愛知県）、甲斐（山梨県）、遠江・駿河・伊豆（静岡県）、相模（神奈川県）、上総・下総・安房（千葉県）、武蔵（東京都、埼玉県）、常陸（茨城県）の国があります。現在の東海地方と関東地方をほぼ合わせた範囲です。

東海道といえば、現在では「道」を発想しますが、古代では「国」の集まりを指しました。そして、都とその東海道の中の国々を結ぶ連絡路（駅路）を後に東海道と呼ぶようになったと思われます。



五畿七道と東海道の国々

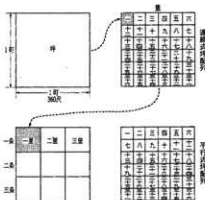


古代東海道の跡（静岡市曲金北遺跡）

**佐野郡** 10世紀前半に完成した『延喜式』には、遠江国内には12郡があったと記され、そのうちの一つが佐野郡です。8世紀初めの国郡制の始まりには「佐益郡」でしたが、722年にここから「山名郡」が分かれ、「佐野郡」となりました。佐野郡内には遠江国府（現在の県庁）と駿河国府を結ぶ駅路が通過しています。そして、休息所としての施設「駅家」があり、その名は「横尾駅」と同書に記されています。横尾駅は『掛川誌稿』では掛川城付近であったとしています。同駅を下西郷地区中宿に求める説もあります。

## 条里と東海道

古代の土地区画制度を「条里制」といい、土地を6町（約648m）四方の正方形に区画し、さらに南北を「条」、東西を「里」と区分しました。一区画は36等分され、「坪」と表しています。現在でも字名に「六ノ坪」という名があるものこの条里制の名残と考えられます。この字名を頼りに条里の復元を試みることもできます。静岡市曲金北遺跡で発見された古代東海道は、この条里制に基づきつくられたのではないかと推定されています。



条里制の区分法

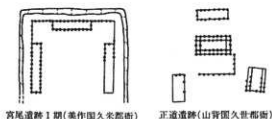
**郡 衙** 郡内には、郡役所とされる施設があります。これを「郡衙」と呼んでいます。全国で発見されている郡衙をみると、建物の配置は決まった形をしていることがわかります。中心の建物となる正庁（正殿）、その両脇には脇殿、そしてこれらを取り囲む塀あるいは櫓があります（これらをまとめて郡庁院という）。その大きさは郡の経済力にもよりさまざまですが、60m×70mが標準的な大きさです。また、郡内で集めた税（稲米）を保管する正倉院があります。

### 佐野郡衙関連遺跡群

袋井市坂尻遺跡、掛川市原

川遺跡、梅橋北遺跡では、佐野郡衙とされる遺構やさまざまな遺物が出土しています。奈良時代の遺構・遺物は坂尻遺跡と原川遺跡から、平安時代の遺構・遺物は梅橋北遺跡から発見されています。

坂尻遺跡では、3間×7間以上、2間×4間以上の細長い掘立柱建物跡が多数発見され、2間×2間などの倉庫建物も10棟以上発見されています。遺物では墨書土器が多数出土し、中でも佐野郡の施設を表す「佐野厨家」、「駅長」、「駅子」などの奈良時代の駅家「日根駅」関連のものが注目されます。坂尻遺跡では9世紀中頃に境に遺構・遺物が減り、梅橋北遺跡では9世紀中頃から10世紀前半にかけての遺物（灰釉陶器・緑釉陶器）が多く出土します。これは郡の施設が移転したことを物語るのかもしれませんが。今後の発掘調査の成果を期待したいところです。



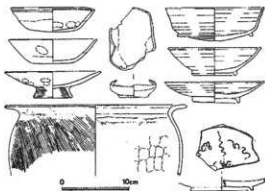
郡衙の建物配置



坂尻遺跡出土「佐野厨」銘墨書土器



坂尻遺跡（大和ハウス地点）南半地区



梅橋北遺跡出土遺物



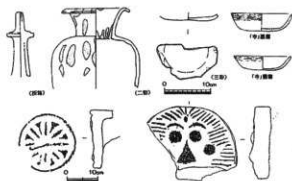
## 六ノ坪遺跡

平成2年度、大池地内の住宅団地「秋葉路」の造成に伴い、行われた発掘調査によって奈良～平安時代の役所関連遺跡と思われる遺構が発見されました。

2間×7間の大型掘立柱建物跡を中心に「コ」の字形に並んだ建物群のほか、倉庫、門、塀、区画溝などが見つかっています。「コ」の字に並んだ建物群には瓦が葺かれていた可能性があります。



六ノ坪遺跡全体写真



六ノ坪遺跡主要遺物

遺物は二彩や三彩陶器のほか、「寺」と墨書された杯が出土しています。瓦は遠江国分寺と同じ瓦が使用されていました。

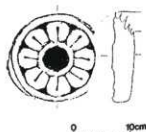
本遺跡は「寺」と記された墨書土器が出土したことから、寺院であるという意見や建物の配置が役所的な要素をもち、駅路と伝路（郡衙と郡衙を結ぶ連絡路）の接合点に位置することから、関所の役割をもった役所関連の施設とする意見があります。

## 深谷遺跡

日本で公式に作られた最初の貨幣、和銅開珎19枚と白銅鏡2枚が発見されています。建物の鎮壇具である可能性もありますが、交通の要衝であり、高所に位置することから、交通に関連する祭祀遺跡である可能性も考えられます。



和銅開珎と鏡が出土したようす



軒丸瓦（東山口小学校蔵）

## 諏訪瓦窯跡

東山口小学校造成時に見つかった窯跡で、ここからは白鳳時代～奈良時代前半頃と思われる瓦が出土しています。軒丸瓦は蓮の花をかたどった文様ですが、これらの瓦がどこで使われていたのかはわかりません。佐野郡では古代寺院の発見がありませんが、この瓦を使用した寺院がこの窯の近くにあることが予想されます。

## 掛川城内遺跡

江戸時代末期に書かれた『掛川誌稿』では「横尾駅」は掛川城内にあったと記されています。それを思わせるような遺物が平成7～11年度の発掘調査により見つかっています。遺構は掛川城の造成時に壊され、その姿を見ることはできませんでしたが、奈良～平安時代の高級品、二彩・緑釉陶器片の出土は、その可能性を浮き彫りにさせてくれました。



掛川城内遺跡出土三彩陶器片

## 古代東海道の復元

さて、古代の東海道は、いったい市内のどこを通っていたのでしょうか。掛川市街地は、地形的に見て、北、南、東の三方を山に挟まれているため、必然的に道路を造るには限られたコースとなります。

古代の道路の復元には、現在残っている字名を頼りに地籍図と照らし合せ、条里の区割りを当てはめる方法や近世の東海道を参考にするなどの方法があります。発掘調査して道の跡を発見するのが何よりも確かな方法ですが、市街地化された場所では、過去の地図から復元する方法が最良といえます。



古代東海道と条里の復元  
(静岡県理文「坂尻遺跡」1992を基に作成)

## さやの中山

現在では「小夜の中山」と言っていますが、『古今和歌集』や『更級日記』など平安時代の記録では「さやの中山」と書かれ、古代には「さや」と言っていたことがわかります。「中山」は交通路の境界をなす山や峠を指す語とされています。このことから、「佐野郡」の境が現在の「小夜の中山」であったことが推測されます。

## 古代東海道と佐野郡

このように古代東海道があった場所を考古学的に立証することは難しいことですが、それを推測することができます。なお、佐野郡域は、西端が現在の袋井市と掛川市の境付近、東端が「小夜の中山」辺りと南北は不明確ですが、現在の掛川市の市の範囲とほぼ同じと思われます。ちなみに、将来合併する大東町と大須賀町は「城銅郡」に含まれると推定されています。

### 〔引用文献〕

『東海道小夜の中山』	建設省浜松工事事務所	1995
『掛川市史 上巻』	掛川市	2000
『静岡県の寺院・官衙遺跡』	静岡県教育委員会	2003

# 年 表

年 代	時 代	主なできごと	県・市内のできごと
500	古墳時代	478 倭王武（雄略天皇）が使者を宋に送る	このころ和田岡古墳群が造られる  宇洞ヶ谷横穴など横穴群が多く造られ始める
600	飛鳥・白鳳時代	593 聖徳太子、摂政となる	
		607 法隆寺建立	
	奈良時代	645 中大兄皇子、蘇我入鹿を滅ぼす	
700		694 藤原京に都を移す	このころ古代寺院が建立される
		701 大宝律令を定める	諏訪瓦窯、六ノ坪、深谷、掛川城内遺跡がつくられる
		708 和銅開珎の発行	
	平安時代	710 平城京に遷都	
		741 諸国に国分寺・尼寺建立の詔発布	722 佐益郡の8郷を割き、山名郡を置く
800	平安時代	794 平安京に遷都	800 富士山が噴火する
			819 遠江国分寺が火災に遭う
900			944 原田の長福寺の鐘が造られる



文化財愛護シンボルマーク

文化財愛護シンボルマークは、文化財愛護運動を全国に推し進めるための旗じるしとして、昭和41年5月に定められたものです。

このシンボルマークは、ひろげた両手の手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗拱（ときょう＝組みもの）のイメージを表し、これを三つ重ねることにより、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承してゆくという愛護精神を象徴したものです。